

すまいるたうん

第27号
平成19年
3月3日



・色の魔術師 摺師 東京都伝統工芸士 三田村喜夫さん

「後を継ぐつもりは、全くなかったんだよ。」

三田村喜夫さん77歳は、父の年夫さんの死後、残された10人近く職人の生活を守る為に東京電機大学を中退して後を継ぎ、昭和26年21歳で摺師の道を歩み出しました。畑違いからゼロからの出発。職人さん達の技を教えてもらうのではなく、見て覚え、霊岸島派の板橋の師匠に師事して1人前になるまで10年の歳月がかかりました。

東京都伝統木版画工芸協会理事長、東京木版画工芸組合組合長を20年、国際浮世絵学会理事を務め、昭和61年度に荒川区登録無形文化財保持者として認定、平成9年に、最優秀技能者章、平成12年に東京都伝統工芸士、平成14年に東京都文化功労賞など多数受賞しております。

かつては日本橋三越にも作品を納めておりました。職人さんは高齢化で次々と辞めていき、現在は一人で浮世絵・千社札・祝儀袋・クリスマスカードなどを手掛けています。

順序摺

①原画（下絵）

江戸時代には、歌麿や広重といった一流の絵師が薄い和紙に筆で描いたものを用いましたが、復刻版の場合には、作品を写真撮影して、それから下絵をおこします。

②彫り

下絵を描いた薄い和紙を裏返しに版木に貼りつけ、墨線を一本一本彫っていきます。ここからは、すべて江戸時代と同じ技法、用具（彫刻刀）を用いての作業となります。

浮世絵ではまず墨線（輪郭）だけを彫った板（墨版）を最初につくり、ここから順次、色版を起こしていきます。

③色差し

墨版を何枚も摺り、原画を見ながら、藍はこことここ、赤はこことここ、という具合に色分けしていきます。全部が済むと、色ごとに、一枚一枚、版木に貼りつけ、墨版と同じように彫っていきますが、ここでは、「線」ではなく、「面」が彫られていくこととなります。

④摺り

色版が彫りあがると、墨版から順次重ね摺りをして仕上がり具合を見ます（校正摺り、いまでいう校正摺り）。それが済むと、いよいよ本摺りに入ります。

墨摺りの上に順次、色版が重ね摺りされていき、最後に素晴らしい芸術作品に仕上がります。摺りには、彫り以上に

様々な技法があり根気と集中力の要る仕事です。色も絵の具を混ぜ合わせて自分で編み出します。

千社札で色数にもよりますが、1色擦り2百枚で2万〜2万5千円です。見せていただいた宮内庁に納める千代紙の色使いのそれは美しいこと、南千住の尾花の手ぬぐいの袋は、三田村さんの作品です。箸袋・祝儀袋など細かな所で粋を伝える依頼者。気に入った依頼者でないとならない、今は玉ノ井親方の祝儀袋を作成しています

南千住に住んで40年、祭りに関わって40年。粋な江戸の文化を今も守り続ける三田村さん。「宵越しの銭は持たない」「向島でよく遊んだよ。」作家の野坂昭如さんや田中康夫さんは飲み仲間。気さくなお人柄、たきたゆうさん（故人）や小島功さんなど著名人と多数親交があり、粋な江戸っ子の心意気は、そのまま作風に現れ、ファンは多くおります。海外からも仕事の依頼があるのですが、体調を崩し、半分のお客様をお断りしている状態です。

私だけでなく多くの方に三田村さんの技術を見ていただきたいですね。今、次男の努さんが埼玉で三田村さんの後継者として摺師として活躍されています。

三田村さんの作品は南千住5丁目の喫茶オンリーでご覧になれます。